

アイコンをたずねて

松本 美保子

昨年の秋のことだ。新聞を開いたとたん、ハリストスという文字が目飛びこんできた。ローカル線沿線の文化財や見どころを紹介しているコラムだった。それによるとハリストス須賀正教会では、所蔵する県指定有形文化財、山下りんの制作したアイコンを年に7回だけ公開している、次は10月16日とある。

房総半島の九十九里浜をのぞむ小さな町に、ロシア正教の教会があると教えてくれたのは、この「測標」への寄稿を推薦してくださった、作家宇尾房子さんだ。彼女は、世間にりんが知られる前から、りんの姪として興味を抱きいろいろ調べていた。それでそこも訪れたことがあるという話をされていた。

奇しくも、その公開日は宇尾さんの一周忌に近かった。葬儀や偲ぶ会を通じ、また遺作を読み返すうち、彼女の神秘的なものへの一抗うという形であるが一強い憧憬を感じずにはいられなくなった。聞けば、彼女の曾祖父や両親は、りんと同じくロシア正教の信者だったという。

亡き人の心の底はおしはかりようもない。けれどその記事を読んだとたん、彼女の原風景ともいえる正教会とはどんなところだろうと、がぜん興味がわいたのだった。

公開日は朝からよく晴れていた。わたしは夫とドライブがてら、その小さな町に出かけた。

雑然とした国道から脇道に入ると、風景が一変した。広々とした秋の田園に心をなごませるうち、道端に目当ての集落名の書かれた看板があらわれた。看板のそばからのびる農道の先には集落があり、その集落の中に、かわいらしい洋風の建物がみえる。

近づいて行くと、洋風の建物の屋根に「八端十字架（はったんじゅうじか）」があるのがわかった。ハリストス須賀正教会の真新しい礼拝堂



だった。宇尾さんの言われていた古い木造の教会はすでになく、平成11（1999）年に再建された建物だった。

教会は、創設者直系のU家が農業のかたわら、家族ぐるみで営んでいた。応対してくださったのは、三代目の当主夫人だった。開場時間には少し早かったけれど、ご厚意で礼拝堂に入れていただけることになった。

室内は十畳ほどで、赤いカーペットが敷かれていた。開け放たれた窓からはのどかに陽が射しこみ、白いアーチ状の天井と壁がまぶしい。

祈りの場にふさわしい静謐な空間だった。そして部屋の奥正面には、アイコンの「装架」された「聖障」がしつらえられていた。

聖障は神さまと人間の場をわけるものという。風変わりな衝立（ついたて）のようでもあり、真ん中には両開きの扉がついている。でもその扉は司祭さましか開けられないのだそうだ。

装架されているのは、りんのアイコンのうちの9枚だった。両開きの扉の左右に小さなものが2枚ずつ、それをはさむように左右に2枚ずつ、さらに扉の上飾りにも扇型の1枚、だ。10枚目のアイコンは扉の向こうにあるという。ご神体のようなもので、信者の方しか目にできない。でもわたしには、その9枚だけでもじゅうぶんだった。

というのも、ひと目で親近感を抱いたからだ。近代の洋画というより現代のイラストだろうか。失礼かもしれないが、マンガ家青池保子氏—西欧中世の修道院を舞台にした作品もある—の絵柄にとってもよく似ているのだ。繊細な、しかし手なれた職人の仕事を思わせる、全体の構成、人物のバランス、筆遣いや色彩のセンス、服のしわの加減や影など、見れば見るほどその印象は深まっていった。すると、色あせやところどころ絵具がはがれて地板が出ているのが、かえって不思議に思えてくる。須賀正教会にこれらが下賜されたのは明治32（1899）年で、100年以上前のものというのが信じられなかった。

絵に見入っているうちに、訪問客はひとり、またひとりと増えていた。当主夫人は、嫁いだとき慣れない祭礼や儀式に戸惑ったこと、創設者U神父は、息子—夫人の舅—が夜おそく酔って帰ってきても黙って足を洗ってくれるような人物だったなど、聞かれるままに答えていた。朝、庭掃除をしていた人たちがいたけれど、信者さんですか、と聞いた人がいた。すると彼女は首を横にふった。あれは近所の方たちで、新聞に載ったからか今日は団体の予約があると話をしたら、さっそく集まってくれたのだそうだ。

アイコンに秘められた自由闊達な精神、そして近所に愛されてきた幸福な教会のやさしい思い。その双方に、宇尾さんの人となりと通じるものを感じずにはいられなかった。

わたしたちは何やらよいおすそわけをいただいたような心持ちで、教会を後にしたのだった。（了）

追記：2011年3月11日の震災により、教会のある匝瑳（そうさ）市も海岸部を中心に被害を受けたもようです。今現在、教会や周辺の被災状況はまだはっきりしないのですが、もう少し落ち着いたら、またたずねてみようと思っています。

多くの方々のご冥福を祈りつつ。

「他人化」のススメ

私の孫は、二人の子供（男）に、それぞれ二人と一人いる。

この年末（2010年）には、二人と二人になる予定だ。

孫との係わりあいだが、「目の中に入れても痛くない」とは、行きそうにはない。

イヤその前に、家庭を築き始めた自分の子供との接点は、限りなく「他人化」すべきだ、とするのが私の考えである。

仕事、受けた教育、置かれた環境、そして都会生活においては住む所など、どれ一つとっても、自分の同時代とは違う。

血統・血筋は連綿と続いて欲しいと願うが、子供が成長すると共に、お互いを包む容器（環境等）は違って来る。

ITなどの技術革新で、超高度化した現在社会はこと更にそうだと言える。

孫に係わる事柄は、頼むからお願いと、請われでもしない限り、旧型容器である親から、新型容器である子供達に、余計な口出しをすることは謹んだ方がいい。

口出しならまだしも、メッタヤタラに物は与えるべきでは無いと思う。

特に食べ物に関しては、「絶対」の言葉を付けたい。

じいちゃん・ばあちゃんが、孫に好まれようと振る舞うのは、心情としては分かるが、孫の親から見れば現実問題として、迷惑な事の方が多いものである。

子供であるから血の繋がりは当たり前だが、その子供の家庭には新型容器に沿う、教育方針も有るだろうし、食生活の知恵も生まれよう。

家族間の決まり事もあるに違い無い。

「じい・ばあ」ちゃんが孫に、「じい・ばあの基準」で食べ物を買って与える事が、孫の親達を一番閉口させてしまうことだと、心得るべきである。

選別能力が未完成の孫には、食べ物を自制しようとする心は勿論無い。

最近、自制心の無い大人も多いのだから、当たりのことである。

単に好きなモノに狙いを定め、“おねだり”をするだけのことである。

「じい・ばあ」ちゃんも得意満面に、そこに照準を合わせて狙い撃ちする。

「ホレ、こんなに喜んでいるではないか」と、次から次へと食べ物を与えてしまう。

これが困るのだ。

バランスの取れた食事をあれこれ考え、結果を見、いろいろと悩みながら育てようとしている両親からすると、大変困るのである。

夫婦ともに互いの両親は他人だから、「じい・ばあ、止めて」との、絶叫的口調の中止命令は、雰囲気的に難しい。

ストップ命令が下らないことをいいことに、「じい・ばあちゃん、と、孫」だけが、いよいよ満足げにいる。

下手をすると孫君は、見るも無残な肥満児に、成り果ててしまうことだって、あり得るかも知れない。

この期に及んでも、まだ「じい・ばあ」ちゃんは、「最近、孫の体格がよくなったんじゃないの」などと、能天気な事を発する。

こうして「病弱体質児、張り子の虎児」が、幾多育ってしまう。

「埼玉のじいちゃん」はケチだから、「水」しか買ってあげないよ、と私はいつも言う。

「水」を貰って喜ぶ孫なんて、先ず居ないから、私の評判は頗る良く無い。

が、・・・いいさ、いいさ、何れ成人式でも迎える頃になったら、きっと喜ぶさと、・・・孫が喜ばば親が喜ばず、親が喜ばば孫が喜ばず、・・・今の世の中、孫との係わりあいには案外に難しい。

ただ「太り過ぎた孫」はソクラテスには、なれないように思えて仕方が無い。

「他人化」を、ススめるゆえんである。

凡句楽